

宗教性の諸相とその構造の国際比較*

— ISSP2008のデータ分析 —

真 鍋 一 史**

I. 目 的

宗教性 (religiosity)——日本では「宗教性」よりも、「宗教意識 (religious consciousness)」という用語が使われることが多いが、ここでは国際比較分析における便宜性の点から、「宗教性」という用語を用いる——の構造に関しては、これまでさまざまな研究がなされてきた (真鍋 2000a、2010b；松谷 2008；小堀 2008などを参照されたい)。それらの研究では、人びとの宗教性が、多次元的な構造をもつものとされ、質問紙調査 (survey research) のデータ分析をとおして、そのような諸次元を抽出し、尺度化する試みが中心的な流れとなってきた。

本稿では、そのような先行研究を踏まえて、人びとの宗教性を、① religious denomination、② religious practice、participation、behavior、③ religious belief の3つの次元に区別した上で、International Social Survey Programme：ISSP (荒牧と小野寺 2004を参照されたい) の Religion Module 調査 (2008年) データの2次的分析 (secondary analysis) をとおして、これら3つの次元に焦点を合わせて、日本、ドイツ、スウェーデンの3か国における宗教性の特徴を鮮明に描き出すことを試みる。

Almond と Verba (1963) は、国際比較調査の方法論的な利点の1つとして、「国際比較研究によって、概念 (変数) の再検討と明確化が促されるとともに、等価性 (equivalence) の問題も慎重に吟味されることになる」という点を指摘している。このような方法論的な視点から、異なる宗教的背景をもつ日本、ドイツ、スウェーデンの3

か国を分析対象国に選んだ (日本、ドイツ、スウェーデンの比較の視座については、真鍋ほか 2000b、2002；真鍋 2000a、2009、2010a、2010bを参照されたい) が、同じ理由から、ドイツについては、調査対象者をさらに「西ドイツ」と「東ドイツ」に分けてデータ分析を行なう。

II. 方 法

ここでのデータ分析のテーマは、人びとの「宗教性」ということである。このようなテーマに対して、データ分析の手順としては、「測定モデル (measurement model) の検証」から始めて、つぎに「因果モデル (causal model) の検証」へと向かうという行き方をとる。両者の区別については、つぎのように説明される。「統計的なデータ解析において、概念を測定するために仮定されるモデルを測定モデルといい、概念間の関係を解明するために仮定される因果モデルと区別される」 (直井 1993)。本稿では、前者の「測定モデルの検証」、つまり「宗教性の測定」といったところに焦点を合わせる。このようなデータ分析の手順に関しては、さらに筆者の以下のような方法論的な立場についても説明しておかなければならない。

一般に、質問紙調査のデータ分析という場合、これまでは、そのようなデータ分析の「結果 (product)」についてのみ報告するものが多く、データ分析の「過程 (process)」——その「具体的な手順 (procedure)」——について報告するものは少なかった。しかし、社会科学の科学化は、じつはこの点を待って、初めて可能となる。いうまでもなく、それは、「科学」と呼ばれる人間の知的営為が、その重要な要件の1つとして「再現

*キーワード：宗教性、ISSP、データ分析、測定モデル、因果モデル、デノミネーション、宗教的信念、宗教的行動

**関西学院大学名誉教授、青山学院大学総合文化政策学部教授

性 (reproducibility)」——だれがやっても、同じ方法をとる限り、同じ結果に到達するという——を要求しているからにはかならない。こうして、筆者はかねてから社会科学の領域の実証的研究 (empirical research) における「プロセス提示型論文 (海野道郎の用語)」の重要性を主張してきた。ここで、このような考え方の線上で、今回の「ISSP2008のデータ分析」に関する具体的な手順を以下に記しておきたい。

1. 質問紙調査の「2 次的分析」に当っては、そのための「青写真」あるいは「ロードマップ」ともいふべきものが必要となる。ここでは、それを「データ分析のための仮説的図式」という形で示す。
2. 「仮説的図式」にあげた「変数 (variable) : 質問項目 (question item)」ごとの「日本」「西ドイツ」「東ドイツ」「スウェーデン」の 4 地域についての「単純集計表」を作成する。
3. NA・DK・Can't choose の%を中心に、「単純集計表」の形をチェックする。
4. 「単純集計表」をチェックした上で、それぞれの変数ごとに、いくつかの選択肢を 1 つにまとめるという recode 作業を行なう。
5. recode 作業後の各変数の「単純集計表」を作成する。
6. Religiosity に関する諸変数の recode 作業後の「単純集計表」から「棒グラフ」を作成する。
7. Religiosity に関する諸変数間の相互の関係を示す「相関マトリックス」を作成する。
8. Religiosity に関する諸変数についての「主成分分析 (Principle Component Analysis)」を行なう。
9. Religious Participation: Attendance of Religious Services (attend R: F25) (縦軸) とそれ以外の Religiosity に関する諸変数 (横軸) との関係を「平均値」の違いによって示す折れ線グラフを作成する。
10. Religiosity に関する諸変数ごとの 4 地域比較——「平均値」による比較——を行なう。
11. Religiosity に関する諸変数 (① Religious Denomination、② Religiousness、③ Religious

Participation) と The Determinants (Socio-Demographic Variables) に関する諸変数との関係を「平均値」の違いによって示す折れ線グラフを作成する。

12. The Consequences (Values and Attitudes Variables) に関する諸変数と The Determinants (Socio-Demographic Variables) に関する諸変数との関係を「平均値」の違いによって示す折れ線グラフを作成する。
13. Religiosity に関する諸変数と The Consequences (Values and Attitudes Variables) に関する諸変数との関係を「平均値」の違いによって示す折れ線グラフを作成する。

本稿では、以上の手順のうち、1～10を取りあげる。この部分が「測定モデルの検証」に対応するものであるからである。

なお、ISSP2008の日本調査の方法と結果については、西 (2009) を参照されたい。

Ⅲ. 仮説的図式・分析結果・考察

1. データ分析のための「仮説的図式」

仮説的図式は、つぎの 2 つの場合に構成される。1 つは、それが調査票 (質問紙: questionnaire) を作成する手引きの役割を果たすものとして構成される場合である。その場合は、その「仮説的図式」にもとづいて実際の質問文が作成され、そのワーディングが検討され、さらに国際比較調査の場合には、その翻訳についての推敲がなされる。もう 1 つは、ある調査データの 2 次的分析のために「仮説的図式」が構成されるという場合である。この場合は、データ分析者の問題関心は、この調査の調査票の立案者・作成者のそれとはまったく独立したものでありうる。いったん調査票が作成され、調査が実施されたならば、そこで得られたデータは、その立案者・作成者の意図から離れて、自由に独自の仮説にもとづいて分析を進めていくことが可能なものである。こうして、筆者の独自の問題関心にもとづいて「仮説的図式」が構成された。したがって、この「仮説的図式」には、調査で用いられたすべての質問項目が盛り込まれているわけではない。T. Parsons の比喩を借

用していえば、筆者の問題関心という「サーチライトの光によって照らし出された」（高根 1979）質問項目のみが、再び丸山真男の訳語でいえば、ここでの「仮説的図式」という「引き出し（frame of reference）」（丸山 1956）のそれぞれの位置に納められているのである。

では、つぎに、ここでの「仮説的図式」（図 1）は、筆者のどのようなデータ分析のアイデア——理論的なストーリー——にもとづいているのかについて解説していきたい。しかし、それに先立って、どうしても述べておかなければならないことがある。それは、今回のような「質問紙調査」をめぐる方法論的問題である。その詳細については、真鍋（2005）を参照されたいが、ここでは少なくとも、つぎの点も指摘しておきたい。それは、質問紙調査法（questionnaire survey method）という技法については、そこには、たとえば「いいかげんな回答」「見栄っ張りな回答」「模範的な回答」などのさまざまな「嘘」が含まれている可能性がある」と批判されながらも、それは人びとの「心（意識）の裏」を捉えるのにきわめて有効な方法であり、さらに社会現象、とくに人びとの「ものの見方、考え方、感じ方、行動の仕方」など、いわゆる subjective reality——P. L. Berger

と T. Luckmann（1966=2003）は、社会現象というリアリティを objective reality と subjective reality に概念的に区別した——に関する「次元の確定」と呼ばれる知的作業は、質問紙調査のデータ分析をとおして初めて可能となるということである。こうして、ここでは、このような方法論的な議論を踏まえて、質問紙調査のデータ分析にもとづく人びとの「宗教性」の諸次元の確定というチャレンジングな課題に取り組むのである。これが、ここでの第 1 の分析課題である。

さて、「仮説的図式」の基本的な考え方であるが、これは調査の質問諸項目をまず 3 つの群に大別するというものである。1 つは、いうまでもなく、今回のデータ分析のいわば key concept ともいべき「宗教性」という概念で一括りにすることのできる質問諸項目群である。もう 1 つは、この「宗教性」の規定要因と考えられる社会・人口統計学的変数——「性（sex）」「年齢（age）」「学歴（education）」「居住地域（community：都市か、それとも農村か）」——である。そして、さらに、このような「宗教性」を構成する質問諸項目群によって規定されると考えられる個人的・社会的な価値観と態度の諸項目——「幸福感（happiness）」「性道徳（sexual morality）」「妊娠中絶（abortion）」

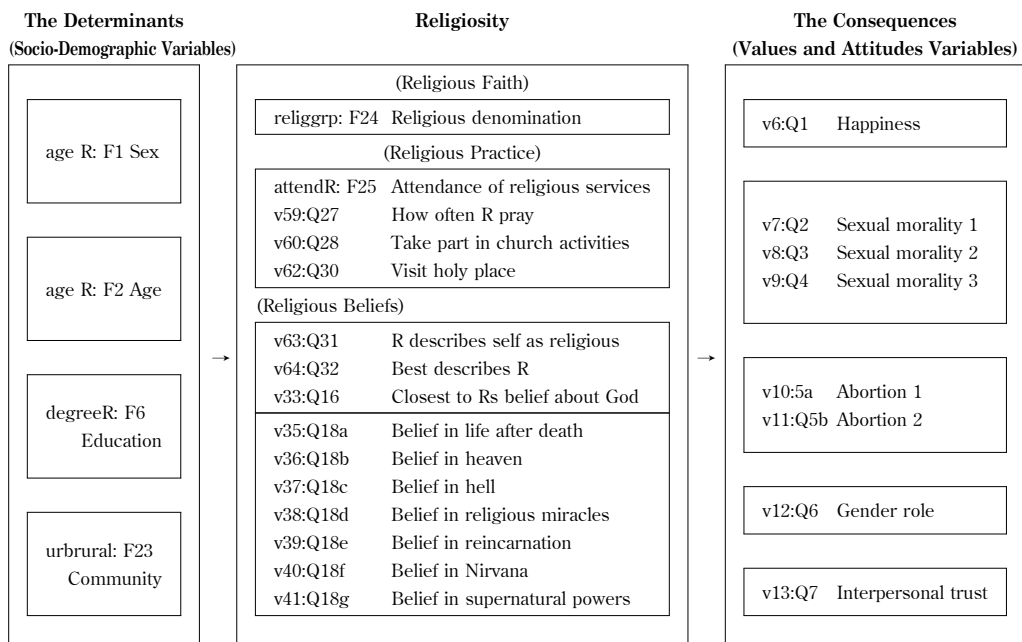


図 1 データ分析のための仮説的図式

「性役割 (gender role)」「対人信頼感 (interpersonal trust)」の諸項目——がくる。ここでの規定 (因果) 関係は、左から右へ、つまり「原因変数」(The Determinants: Socio-Demographic Variables) から「宗教性」へ、そして「宗教性」から「結果変数」(The Consequences: Values and Attitudes Variables) へ、という流れで考えられている。いうまでもなく、このような理論仮説的な「因果モデル」の検証が、ここでの第2の分析課題となってくる。この理論仮説は、宗教性をめぐる理論的および実証的研究についての「文献研究 (literature survey)」にもとづいてまとめられた以下のような諸「命題」を踏まえたものである。

- A. 社会—人口統計学的変数と「宗教性 (宗教意識)」との関係に関する諸仮説
 - 1. 女性は男性よりも宗教性のレベルが高い。
 - 2. 高年層は若年層よりも宗教性のレベルが高い。
 - 3. 低学歴層は高学歴層よりも宗教性のレベルが高い。
 - 4. 農村住民は都市住民よりも宗教性のレベルが高い。
- B. 「宗教性 (宗教意識)」と個人的—社会的な価値観と態度との関係に関する諸仮説
 - 1. 宗教性のレベルの高い人は低い人よりも幸福感が高い。
 - 2. 宗教性のレベルの高い人は低い人よりも性道徳については厳格である。
 - 3. 宗教性のレベルの高い人は低い人よりも妊娠中絶についてはきびしい考え方をする。
 - 4. 宗教性のレベルの高い人は低い人よりも性役割については保守的な見方をする。
 - 5. 宗教性のレベルの高い人は低い人よりも対人信頼感が高い。

最後に、今回のデータ分析の key concept ともいうべき「宗教性」の諸項目について、説明しておかなければならない。本稿では、「宗教性」という構成概念 (constructed concept) を、これま

での先行研究の成果を踏まえて、① religious denomination、② religious practice、participation、behavior、③ religious belief、の3つの次元に分けたということについては、すでに述べた。ここでは、これら①②③に対応する質問項目として、①に1項目、②に4項目、③に10項目を割り当てた。データ分析の第1の課題は、これら「宗教性」の諸項目に焦点を合わせて、その諸相と構造を明らかにするということである。

2. 単純集計からの知見の読み取り

データ分析において、どのような分析の方法を採用するかは、そのような分析の目的に合わせて、その都度、決定されるべきものである。分析の方法は「手段」であり、「手段」のよしあしは、その「目的」に照らして判断される。単純集計 (simple tabulation)——「集計製表の段階で、調査対象全体の反応について、調査項目ごとの度数分布表を作成すること」(尾嶋 1993)——の方法も、その例外ではない。ここでの目的は、単純集計にもとづいて、日本、ドイツ (西ドイツと東ドイツ)、スウェーデンの3つの国 (あるいは4つの地域) の「宗教性」の特徴をその度数分布の形に焦点を当てて描き出すということにある。そのような目的に合わせて、ここで採用したデータ分析の仕方が、初めにあげた手順の2～6に示されている。この2～6の手順は、単純集計表作成の常套的な方法であるので、とくに説明の必要もないであろう。ただ、データ分析の再現性 (reproducibility) の確保という点に鑑みて、4の作業については、その作業内容を SPSS のシンタックスの形で示しておきたい。

```

recode religgrp(1=0) (2 thru 11=1).
recode attend(1 thru 4=4) (5=3) (6,7=2) (8=1) (9,
sysmis=99).
recode v63(1,2=5) (3=4) (4=3) (5=2) (6,7=1) (8,9=
99).
recode v64(1=4) (2=3) (3=2) (4=1) (8,9=99).
recode v33(9=99).
recode v35 to v41(1=5) (2=4) (8=3) (3=2) (4=1) (9=
99).
recode v59(1=1) (2,3=2) (4,5,6=3) (7,8,9=4) (10,11

```

=5).

recode v60(1=1)(2=2)(3=3)(4=4)(5 thru 9=5).

recode v62(1=1)(2=2)(3,4,5=3)(9=99).

以下においては、このような手順にもとづいて作成された、質問項目ごとの「棒グラフ」から、知見の読み取りを試みる。

(1) 信仰と宗派・教団 (デノミネーション : Religious Denomination)

調査対象者の宗派・教団について尋ねる質問項目 (F24) は、これまでの「宗教性」に関するさまざまな調査研究において、中心的な位置を占めてきた。それにもかかわらず、そのような質問項目の実際のワーディングは、それぞれの調査プロジェクトごとに、さらに同じ調査プロジェクトにおいても調査対象国ごとに必ずしも同一ではない。たとえば、ISSPにおいては、日本では“Do you have a religious faith?”という質問文——これは筆者が日本語版の質問文から英訳したものである——が用いられている。そして、ドイツでは“To which religious group do you belong?”、さらにオランダでは“Do you consider yourself as belonging to a church/ denomination or religious group or community?”という質問文が使われている。

ここでの問題点として、このように各国で独自のワーディングが用いられることをどう考えるかということがあげられる。いうまでもなく、国際比較調査というのは、基本的には「同一の」調査を「異なる」国ぐにで繰り返し「反復する」ことによって、それらの国ぐにの違いを明らかにするものである。そして、その反復には、つぎの2つのタイプがあるといわれる (Lykken, 1968)。

- ① 一字一句同一の質問文を用いた調査の反復 (literal replication) というタイプ。
- ② 機能的に等価な質問文を用いた調査の反復というタイプ (functionally equivalent conceptual replication)。

そこで、ISSPの「宗派・教団」を尋ねる質問文は、国ごとにレトリカルな表現においては異なっているが、機能的には等価であるという前提が置かれているものと考えられる。しかし、その

等価性はどのように検証されるのであろうか。この点は今後に残された重要な課題であるといわなければならない。

ここでは、このような方法論的な問題はしばらく置き、その結果——「棒グラフ」の高さ(低さ)に示されたそれぞれの地域の回答者の割合——の検討に移る。さて、図2-1からするならば、「何か宗教を信仰している」(あるいは「何か宗派・教団に所属している」)という回答者の割合は、西ドイツ (83.7%) で高く、つぎがスウェーデン (69.1%) で、日本 (37.5%) と東ドイツ (24.4%) は低い。

「価値観調査」データの1995年および2000年とくらべてみるならば、西ドイツは1995年が77%、2000年が87%、スウェーデンはそれぞれ92%、76%、日本は35%、44%、東ドイツは25%、34%となっている (Halman, et al., 2008)。この結果からするならば、今回の ISSP2008の%も、それらとはそれほど大きな差異はないものといえる。

まず、ドイツでは、いわば「宗教上の分割 (religious division)」ともいうべき現象が安定したものとなっている。南ドイツとライン川沿岸以西の地域はカトリック、北ドイツと東ドイツはプロテスタント (大半はルーテル派) というように、人びとは「宗教という点で同質的な社会システム」 (religious homogeneous social system) に組み込まれている。つまり、西ドイツで宗教といえば、それは「どれか1つの宗教に属する (belong to only one religion)」か、それとも「どの宗教にも属さない (belong to no religion)」か、のいずれかの選択となり、前者の場合は、カト

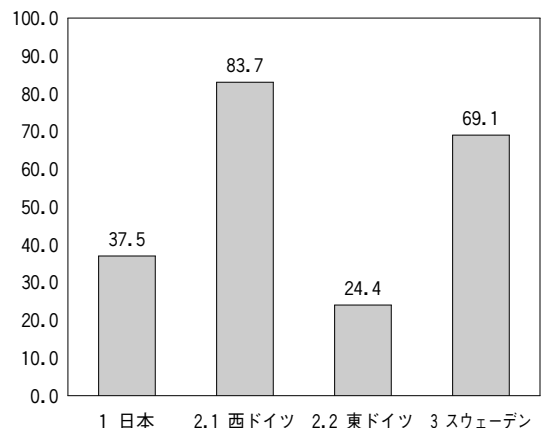


図2-1 デノミネーション：信仰と宗派・教団

リックあるいはプロテスタントの教会への「教会税」を払うことになる（真鍋と Jagodzinski 2000）。こうして、西ドイツにおいては、いわゆる「世俗化（secularization）の現象」がさまざまな形で議論されてきているにもかかわらず、質問紙への回答という形においては、多くの人びとが「宗派・教団への所属」を表明していることは注目される。

つぎに、スウェーデンについては、それが「価値観調査」から、1995年が92%、2000年が76%、そして今回が69%と減少してきている。この点については、それは、スウェーデンにおいては2000年にスウェーデン教会が「国教会」でなくなり、「自由教会」になった——“From State Church to Free Folk Church”という表現が用いられる。ここで“Free”というのは、従来の“Free Church”の意味ではなく、端的に教会が「国家から独立した主体」となったということを意味しており、また“Folk Church”というのは“A Church for All, Especially the Most Vulnerable”ということの意味している（Bäckström, et al. eds, 2004; Edgardh and Pettersson, 2010）——という、いわゆる「国家と宗教」の分離という出来事が大きくかかわっていると考えられる。つまり“State Church”の時代には、人びとはその誕生とともに自動的にスウェーデン教会のメンバーとして登録されていた。ところが“Free Folk Church”となるとともに、スウェーデン教会で「洗礼（baptism）」を受けた者だけ——「堅信（confirmation）」の有無は問わない——がメンバーとして登録されることになったのである。このような歴史的・社会的な出来事が、質問紙調査における「宗派・教団への帰属の有無を回答する者」の減少の背景として考えられる。

しかし、このような歴史的・社会的な出来事にもかかわらず、その減少の程度は小さい、つまり、「宗派・教団をあげる者」がほぼ70%といったところにとどまっている、という読み取りの仕方もありうる。筆者は、この点に注目し、そのような現象を「慣習的なデノミネーション」として性格づけている。スウェーデン人の多くは、その子供の洗礼に際しては、それを「信仰の証し」としてよりも、むしろ「生活上の慣習」として受け

入れているというのが、スウェーデンでのフィールド調査（field research）における筆者の観察の結果である。まさにマックス・ウェーバーのいう「伝統的行為」という行為類型の具体的なケースということができるのである（Weber, 1921=1953）。

さらに、日本については、この37.5%を四捨五入して38%という数値は、これまで日本で実施されてきた同種の調査結果とくらべるならば、やや高めとなっているものの、それでもその差異はそれほど大きなものではない。これまで、ごく大まかにいえば、「宗教団体への帰属」が10%台、「信仰をもっている」が30%台というのが、日本人の一般的な傾向とされてきた。しかし、さまざまな質問紙調査の結果からするならば、戦後60年間に日本人の「信仰心」の割合は7割程度から現在の数値へと明らかに低下してきている。石井（2007）は、戦後の日本人の宗教意識・宗教行動の変化をつぎのようにまとめている。

「こうした変化は、伝統宗教の希薄化、組織化されていない宗教性の拡散といい換えることもできる。伝統宗教に関する儀礼や行事の実施率や関心が低下している。神棚や仏壇の保有率が減少するなど、日本人の間に強く存在した祖先崇拜や氏神信仰は弱くなっている。他方で、自分や家族といった狭い人間関係の中で、必要に応じて現世利益的行動を行なったり、宗教的な情報を獲得しようとする傾向が存在する。あるいは伝統的な形態とは異なった、個人に立脚した宗教的意識と宗教行動への移行ということもできるだろう。」

以上の観察は、すでに筆者による別の論文（真鍋 2008、2009）において部分的には確認されているが、今後のデータ分析に向けての興味深い視座となるものといえる。

最後に、東ドイツが24%という最も低い数値を示した点については、東ドイツが社会主義体制下におかれたことを考えるならば、これは容易に納得できるものといえる。社会主義体制の世界観からするならば、宗教は人びとにとっては「迷信」あるいは「阿片」にすぎないものであり、また、

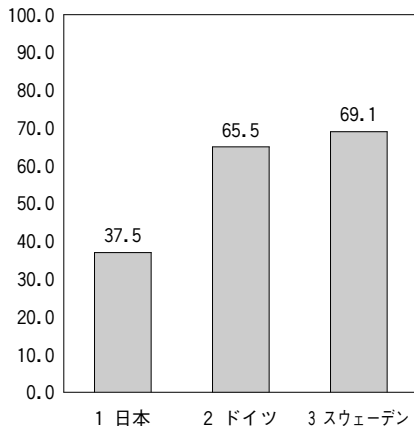


図2-2 デノミネーション：信仰と宗派・教団

いわゆる伝統的な教会のイメージもそれが権威主義的な社会秩序のあり方を反映したものであるとして否定された。こうして、東ドイツにおいては、価値観という点においては、カトリックと無信論者 (atheist) との間には大きな距離があり、プロテスタントは両者の中間にあって、ややカトリックよりのところに位置してきたのである。

ところで、人びとの「宗教性」を構成する一要因とされる「デノミネーション」の各国（あるいは地域）の比較については、さらに、つぎのような方法論的な知見についても記しておかなければならない。それは、図2-1と図2-2との比較という視座である。いうまでもなく、前者はドイツを「西ドイツ」と「東ドイツ」に分けた集計結果であり、後者は両者をまとめて集計した結果である。前者の集計の仕方では、「西ドイツ」と「東ドイツ」の宗教性の特徴が端的に表れているのに対して、後者の集計に仕方では、それが全く見えなくなってしまう、両者の特徴がいわば混ぜ合わされて65.5%という結果になっているのである。こうしてみると、ドイツのケースは、型にはまった (conventional) 国際比較というものが、社会科学的是にはまったく意味のないものになってしまうことを示した、きわめて重要な分析事例であるといわなければならないのである。

(2) 宗教的な信念 (Religious Beliefs)

(i) 自分は宗教的 (religious) か？

この質問項目については、何よりもまず、その

「翻訳」についての問題を指摘しておかなければならない。この項目の Source (あるいは Master) Language Questionnaire でのワーディングはつぎのとおりである。

V63 Would you describe yourself as....

1. Extremely religious
2. Very religious
3. Somewhat religious
4. Neither religious nor non-religious
5. Somewhat non-religious
6. Very non-religious
7. Extremely non-religious
8. Can't choose

それに対して、日本調査の Translated Language Questionnaire では、そのワーディングは以下のようになっている。

Q26 あなた自身には信仰心や信心がありますか。それともありませんか。

1. とてもある
2. かなりある
3. まあある
4. どちらともいえない
5. あまりない
6. ほとんどない
7. まったくない
8. わからない
9. 無回答

ここでも、日本調査、つまり TLQ のワーディングは、レトリカルには SLQ のそれと異なっても、機能的には等価であるとされていると考えられる。しかし、その等価性はどのように検証されるかは、今後の課題として残される。

さらに、すでに述べたように、「宗派・教団」についての質問のワーディングは、ドイツとスウェーデンにおいては “belong” という表現を採用している。したがって、この両国においては、「宗派・教団」を尋ねた後で、自分が “religious” と思っているかどうかを聞くことで、特定の「宗派・教団」に所属はしているが、その同じ人が自分のことをそれほど「宗教的」であるとは思っていないという、ヨーロッパにおける「宗教性」の特徴が浮き彫りになってくる。具体的にいうならば、図2-1と図3を対応させながら検討するなら

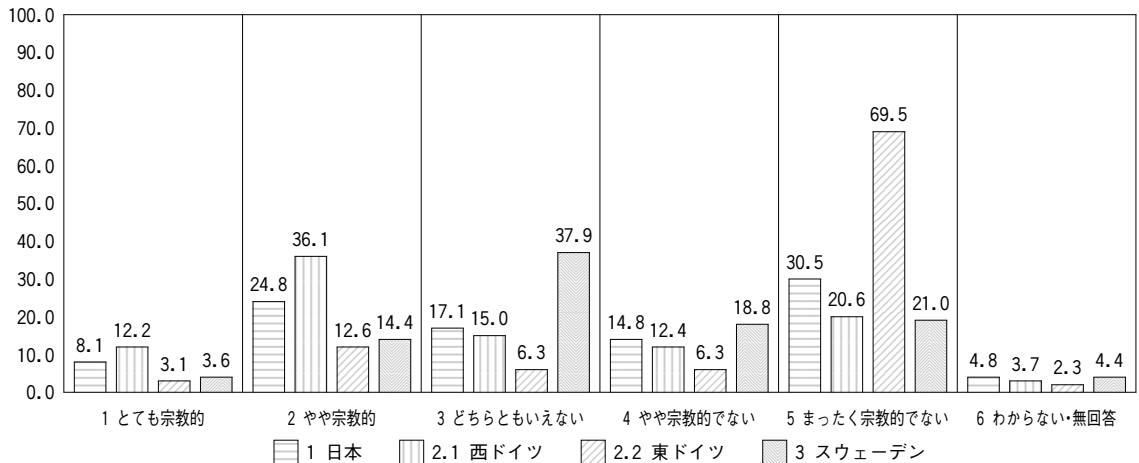


図3 自分は宗教的か？

ば、西ドイツでは「宗派・教団」への所属の83.7%に対して、「宗教的（「とてもある」+「かなりある」+「まあある」）」は48.3%にとどまり、同じくスウェーデンでは前者の69.1%に対して、後者は18.0%にとどまっている。ところが、日本の場合は「宗派・教団」についての質問のワーディングは、「あなたは何か宗教を信じていますか」で、ここでの「宗教的か」の質問のワーディングが「あなたは信仰心や信心がありますか」であるところから、2つの質問がほぼ同じ内容のものとなっている。そして、その結果として、前者は37.5%、後者は32.9%で、両者の差はドイツとスウェーデンの場合にくらべて小さなものにとどまっていると考えられる。

さて、図3から、さらにつぎのような知見を読み取ることができるであろう。

- ①「宗教的である」という回答の割合が西ドイツで高い。
- ②「宗教的でない」という回答の割合が東ドイツで高い。
- ③「どちらともいえない」という回答の割合はスウェーデンで高い。
- ④日本では、回答が「宗教的である」と「宗教的でない」に2分されている。

以上の知見から興味深い点をあげるとするならば、西ドイツ、東ドイツ、スウェーデンは、それぞれ、「宗教的である（「とても」+「かなり」）」「やや宗教的である」「どちらともいえない」「や

や宗教的でない」「宗教的でない（「ほとんど」+「まったく」）」までの5つのカテゴリーのどれかで最も高い%を示しているのに対して、日本はそのカテゴリーにおいても最も高い%を示すということがない。つまり、カテゴリーごとの回答の%の差が相対的に小さい。「目立った」ところがない。これは、日本の「宗教性」の特徴といえるものであるかもしれない。

(ii) 宗教か？／スピリチュアリティか？

日本調査のワーディングはつぎのとおりである。

V64 (Q27) つぎの文章のうち、あなたご自身に最も当てはまるのはどれでしょうか。

1. 宗教を信仰し、聖なるものや霊的なものに関心がある（両方肯定型）
2. 宗教を信仰するが、聖なるものや霊的なものには関心はない（宗教選好型）
3. 宗教を信仰しないが、聖なるものや霊的なものには関心がある（スピリチュアリティ選好型）
4. 宗教は信仰しないし、聖なるものや霊的なものにも関心はない（両方否定型）

この質問項目の意味・意義については、欧米社会において必ずしも合意形成がなされているわけではない。それは、一方で、伝統的な「宗教」を中心とする「宗教性」の捉え方があるのに対して、他方で、新しく出てきたスピリチュアリズム

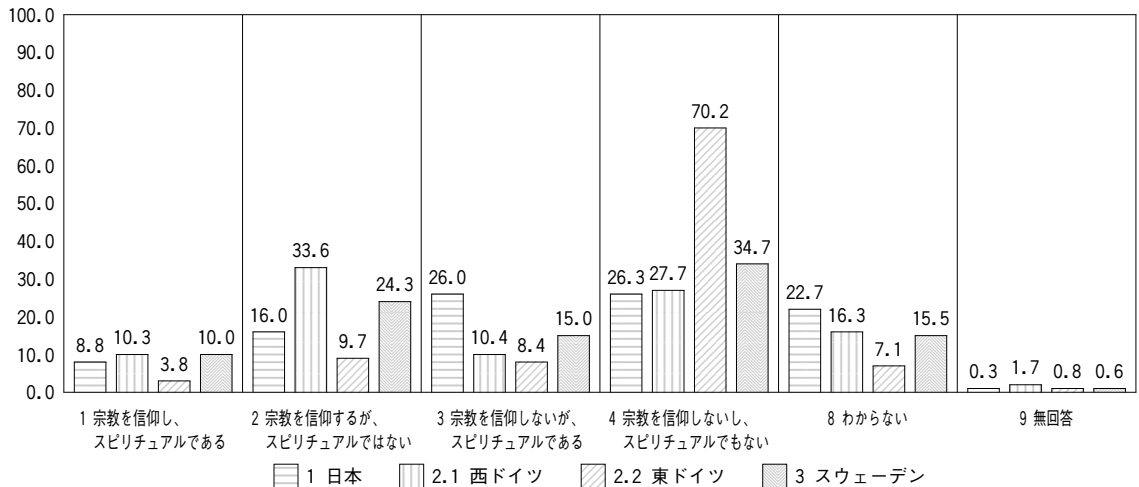


図4 宗教か？／スピリチュアリティか？

を中心とする「ニューエイジ」タイプのものに焦点を合わせる「宗教性」の捉え方がある、という考え方があがるが、それとともに、スピリチュアリズムは決して新しい現象ではなく、古くから伝統的な宗教——たとえば、キリスト教の場合では、とくにカトリック——に内在してきたものであり、両者を対立軸の枠組みで位置づけるのは適当でないという考え方もある、からである。このような2つの考え方があることは事実である。しかし、筆者の問題関心は、この2つの「考え方」の「真偽」という点にあるのではなく、「何でもない普通の人びと（lay people）」の心のなかで、このようなテーマがどう受け取られているのであろうかという点にある。このような「問題の立て方」の視座から図4を見るならば、以下のような知見が読み取れる。

①西ドイツがやや例外的である——つまり、西ドイツの回答者の3割強という多数者が「宗教選好型」である——という点を除いて、全体としては「両方肯定型」の%が低く、「両方否定型」の%が高く——とくに東ドイツではこの型が70%までを占めている——、「宗教選好型」と「スピリチュアリティ選好型」の%は両者の中間のところにある。

②「宗教選好型」と「スピリチュアリティ選好型」をくらべてみるならば、これまでキリスト教の国として性格づけられてきた西ドイツとスウェーデンでは、「スピリチュアリティ選好型」

の%よりも「宗教選好型」の%の方が高いという結果が示されているのに対して、仏教・神道の国とされてきた日本では逆に「宗教選好型」の%よりも「スピリチュアリティ選好型」の%の方が高いという結果となっている。

③“Can't choose”（日本語訳は「わからない」）という選択肢については、日本の%（22.7%）が最も高くなっている。

以上から、西ドイツ・スウェーデンと日本の「宗教性」の特徴が浮き彫りになったといえよう。それは、西ドイツ・スウェーデンにおいては「宗教」と「スピリチュアリティ」を対立軸でとらえる試みも意味のないものではなく、また日本では「宗教」という軸だけではなく、さらに「スピリチュアリティ」という軸を加えても、なお「答えられない」何かが残るということである。

この質問項目については、さらにもう1点、検討しておかなければならない課題がある。それは、この項目を前の項目——「自分は宗教的か？」を尋ねる項目——とくらべてみるならば明らかとなる。前の項目では、回答の選択肢がExtremely religious から Extremely non-religious までの「宗教性のレベル」という次元において、はっきりと高低のrank orderに従って並べられている。ところが、以上で検討してきた、ここでの質問項目のいわば「パターン型」の選択肢においては、「宗教性」のレベルについてのrank orderを先験的（a priori）に設定することはできない。では、

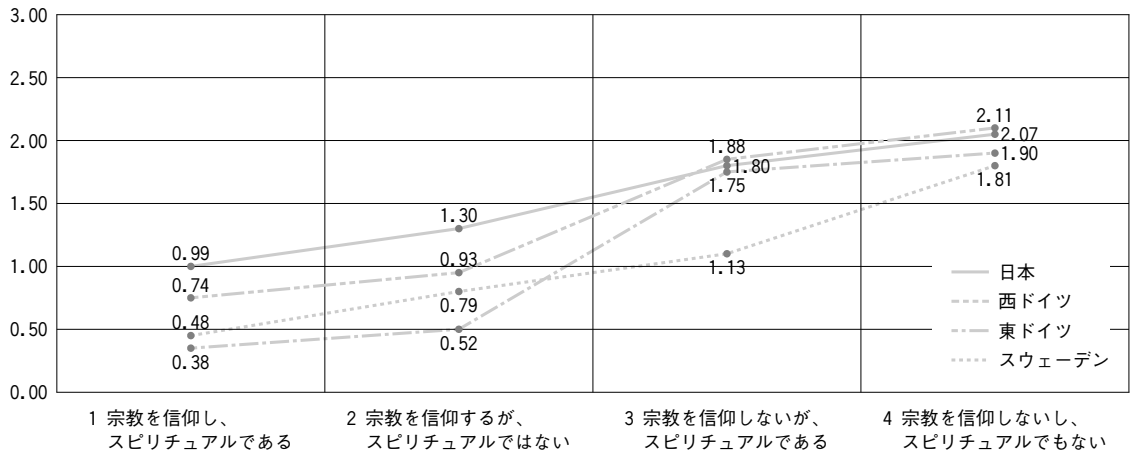


図5 「宗教か？／スピリチュアリティか？」と「礼拝・参拝・参詣」との関係
——「平均値」のプロット——

このような rank order の存在は、どのようにして実証的に確認することができるであろうか。ここでは、以下のような考え方と手順 (Lewis-Beck 1994) を採用する。

Kisala (1997) は「ヨーロッパでは宗派・教団に所属することが慣習となっているので、そこでの世俗化の進度を測定しようとするならば、宗教行事への参加度の方がより適切な指標となる」ことを指摘している。このようなヨーロッパの国々における「宗教性」の特徴については、いままさに、この小論において、ISSP2008調査のデータ分析をとおして、その解明を進めているところであるが、ひとまずこの観察からするならば、ヨーロッパにおける「宗教性」は「宗教行事へ参加度」によって最も適切に測定されるということになる。そうだとするならば、ここでの質問項目 (v64) と「宗教行事への参加度」(F25) との関係が右上がりの monotone の関係となっていることが検証されるとするならば、v64の「パターン型 (つまりカテゴリー型)」の選択肢にも「宗教性」のレベルについての rank order の存在を確認することができた、ということになるであろう。そこで、つぎのようなデータ分析の手順をとる。

①「宗教行事への参加度」を捉える質問項目として F25: attend (attendance of religious services: 礼拝・参拝・参詣の頻度) を用いる。

②この質問項目の選択肢のカテゴリーに以下の

ような点数を与える。

1. Never = 0 点
2. Yearly or less = 1 点
3. Several times a year = 2 点
4. Monthly or more = 3 点

③その上で、日本、西ドイツ、東ドイツ、スウェーデンの4つの地域について、「宗教か？／スピリチュアリティか？」の質問項目の、上述の「パターン型」の4つの選択肢のそれぞれを選んだ回答者ごとの「平均点」を算出し、その数値をグラフにプロットし、それらの点をつないだ折れ線グラフを描く。

こうして作成された折れ線グラフが図5に示されている。この結果からするならば、「礼拝・参拝・参詣への参加度」と「宗教か？／スピリチュアリティか？」との関係のグラフは、完全な直線ではないものの、やはりはっきりと右上がりの monotone の形を示している。

以上から、「宗教か？／スピリチュアリティか？」の「パターン型」の選択肢についても、「宗教性」のレベルについての rank order の存在を想定しても間違いではない、ということが確認されたといえるのである。こうして、後のデータ分析において、「宗教性」というここでの key concept を構成する諸項目 (変数) 間の相互の関係の構造を示す「関連マトリックス」の作成や、それらについての「主成分分析」の実行の際に、「宗教か？／スピリチュアリティか？」の項目を

含めても、とくにテクニカルな問題は発生しないということが確かめられたのである。

(iii) 神の存在を信じるか？

日本調査のワーディングはつぎのとおりである。

V33 (Q16) あなたは、神について、日ごろどのようにお考えですか。

1. 神の存在を信じない
2. 神が存在するかどうか分からないし、存在するかどうかを明らかにする方法もないと思う
3. 神がいるとは思わないが、何か超自然的な力はあると思う
4. 神の存在を信じる時もあるし、信じない時もある
5. 神の存在に疑問を感じることもあるが、神は存在すると信じている
6. 私は実際に神が存在することを知っており、神の存在に何の疑いももっていない

さて、ここでも、まず「翻訳」についての問題を提起することができる。国際比較調査の質問紙の翻訳については、① literal translation と、② functional translation、の2つの考え方がある、ということについてはすでに述べた。この質問文の日本語訳については、②の立場がとられていると考えられる。じつは選択肢の3. の SLQ での表現は I don't believe in a personal God で、“God (選択肢の3. 以外の場合の「神」の表現は“God”である)”と“a personal God”の使い分けがなされている。ところが、日本では、一般にそのような概念的区別がなされていない——“a”についての訳出の問題はしばらく置くとして——ので、②の立場に立って、いずれの選択肢においても「神」という日本語訳がなされているのであろう。しかし、それでは、あまりにも多くの情報が失われてしまう。functional translation という立場は、何とか調査が可能となる「等価性」のミニマムのところの発見でよしとする考え方ではないであろう。筆者は“a personal God”という考え方には、①「人にして神」、②「人の形をした神」、③「人の心をもつ神」という内容が複合的に含まれていると考えている。このような“a

personal God”という神のイメージは西欧のものであり、日本のそれとは全く接点がないというのもやや狭小な考え方である。じつは両者には共通するところもある——たとえば、和辻 (1947) は「仏徒は観仏という、みずからの眼をもって仏のイメージを見ようとすることに努力したが、この点で『仏像』が大きな役割を果たした」ことを指摘している——のではないだろうかというのが筆者の仮説である。これが1つ目の問題提起である。

そして、もう1つの問題提起は、ここでの「神」という表現については、一神教的な考え方を前提とすることのできない日本では、少なくとも「神仏」という表現の方がのぞましいのではなかろうか——たとえば、われわれは、普段、何気なく「神も仏もない」といういい方をする——ということである。「少なくとも」としたのは、日本においては「神仏」という表現についても、さらにそれを「漢字」で書いたとき、「ひらがなやカタカナ」で書いたとき——たとえば「カミヤほとけ」というように——では、人びとのイメージに差異が出てくるという議論もあるからである。

さて、以上の議論を踏まえて、図6の結果を見れば、つぎのような知見が読み取れる。

①「神の存在を信じない」という回答は東ドイツが群を抜いて高い。ここで興味深いのは、この回答は「無宗教の国」「信仰なき宗教」とされてきた日本で最も低いという点である。

②「神が存在するかどうかはわからないし、存在するかどうかを明らかにする方法もないと思う」という、ある意味で啓蒙主義的な回答は日本とスウェーデンでやや高い。

③「神がいるとは思わないが、何か超自然的な力はあると思う」という回答は、スウェーデンで最も高く、つぎが日本となっている。この選択肢の回答者の%がスウェーデンにおいて最も高くなっている点については、それは先行研究の知見を再確認するものといえる。たとえば、一例として、Jagodzinski (2006) は、「ヨーロッパ価値観調査 (European Values Studies : EVS)」の1999年の調査データの分析を行なっている。EVSでは、神のイメージの回答の選択肢として、つぎの4つをあげている。

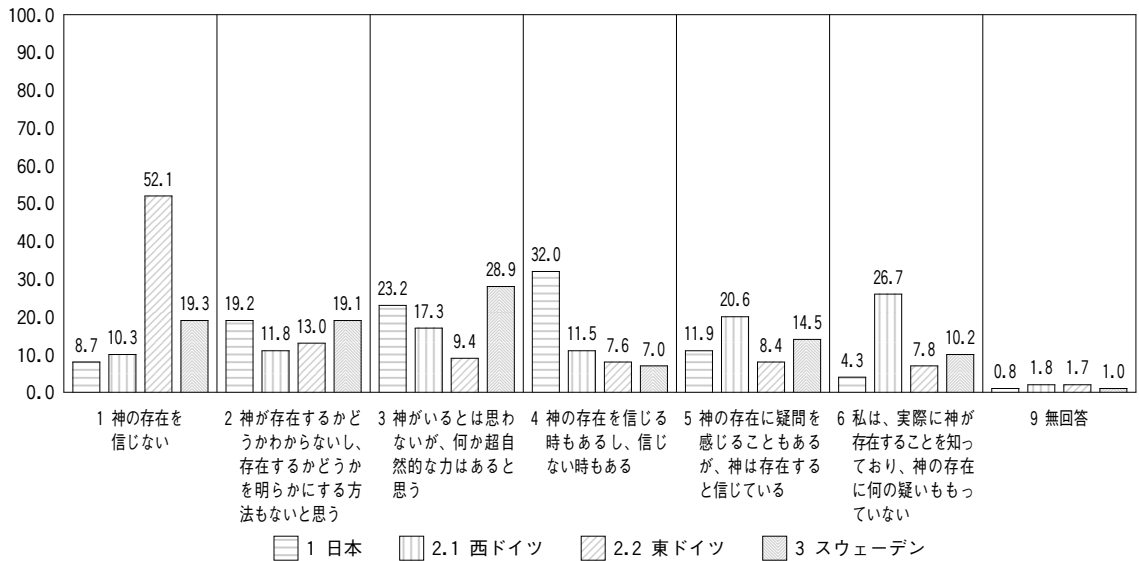


図6 神の存在を信じるか？

- ・ a personal God
- ・ some sort of spirit or life-force
- ・ I don't know what to think
- ・ I don't believe in any sort of spirit, God, or life-force

つまり、ここでは神のイメージとして“a personal God”と“spirit or life force”がいわば「対立軸」として設定されている。そして、Jagodzinskiによれば、とくにスウェーデンとポーランドにおいて対照的な結果が見られるという。それは、ポーランドではa personal Godをあげる回答者がじつに81.8%にまで達し、life-forceはわずか9.6%にとどまるのに対して、スウェーデンでは逆にlife-forceをあげる回答者が52.7%を占め、a persona Godは15.8%にとどまっているということである。このような先行研究からするならば、スウェーデンをはじめとする北欧諸国における「a personal Godからlife-forceへ」という神のイメージの変化こそが、現代のヨーロッパに出現した新しい「宗教性」の特徴の1つといえるものであり、その一端を今回のデータ分析の結果からも垣間見ることができるといえないであろうか。

因みに、以上の回答の選択肢のa personal Godとlife-forceについては、若干の説明が必要であろう。

まず、前者のa personal Godという用語については、これまでの日本語版の調査票では、(a)「人格神」という専門語訳を用いるか、それとも(b)“personal God”の“personal”の部分省略して単に「神」と訳するのか、のいずれかの方策がとられてきた。(a)はキリスト教的な「神概念」をできるだけ忠実に伝えようとする訳出の試みであり、(b)は逆にそれをできるだけ払拭して日本の事情に合わせようとする訳出の試みであるといえる。しかし、その訳出については、これら2つの方策にとどまらず、いわば(c)の方策というものも考えられるのではなかろうかというのが、筆者の考え方である。すでに述べたように、従来から、筆者は、キリスト教の教義からするならば、“personal God”という考え方には、「人にして神」「人の形をした神」「人の心をもつ神」という内容が複合的に含まれていると仮説的に考えてきた。そうだとするならば、これらの意味内容をそれぞれ部分的に表現する訳出の仕方も可能になってくるのではなかろうか。今後の課題としたい。

つぎに、後者のlife-forceという用語については、これはベルクソン(H. Bergson)が使ったélan vital(エラン・ヴィタル)、つまり日本語訳では「生命の躍動」という用語がもとになっているのではなかろうかと考えている(滝浦 1989)。

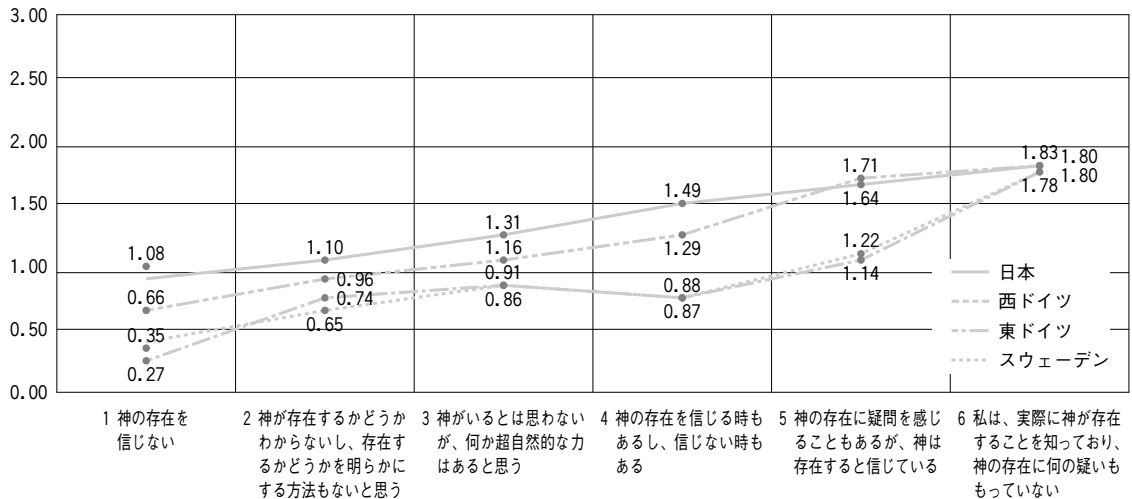


図7 「神の存在を信じるか？」と「礼拝・参拝・参詣」との関係
——「平均値」のプロット——

このような質問紙（調査票）の原案作成者の意図の探究も、国際比較研究の重要な課題となるのではなからうか。

さて、今回の ISSP 調査の選択肢の 3. I don't believe in a personal God, but I do believe in a Higher Power of some kind にもどるならば、Higher Power とその日本語訳の「超自然的な力 (supernatural power)」との意味の「等価性」についてはしばらく置くとしても、God の意味内容の違いにもかかわらず、スウェーデンと日本の回答者の%が高いという点は興味深い。

④「神の存在を信じる時もあるし、信じない時もある」という、いわば信仰の「コンテクスト性」ともいうべきものを表現した回答は、ほかの地域を引き離して日本で高い。この点は、「原理・原則にこだわらない日本人」といわれる日本の心性の特徴の一端を示したものとといえるかもしれない。

⑤最後の 2 つの選択肢、つまり「神の存在に疑問を感じる時もあるが、神は存在すると信じている」という回答と、「私は、実際に神が存在することを知っており、神の存在に何の疑いももっていない」という回答は、ほかの地域を引き離して西ドイツで高い。この点は、西ドイツでは「宗派・教団」への所属の%が高く、自分は「宗教的」であると考えている回答者の%が高く、「宗教を

信仰している」回答者の%が高い、という以上の知見と首尾一貫したものといえる。

最後に、前の質問項目の「宗教か？／スピリチュアリティか？」の場合と同様に、ここでの「神の存在」について尋ねる質問項目についても、その回答の選択肢に先験的に rank order を想定することはできない。そこで、前の質問項目の場合と同様の手順で、「礼拝・参拝・参詣への参加度」と「神の存在についての考え方」との関係を示す折れ線グラフを作成した。それが図 7 である。この結果から、4 つの地域において、折れ線グラフはすべて右上がりの monotone の形を示していることがわかる。つまり、「神の存在についての考え方」のパターン型の選択肢についても、「宗教性」のレベルの「低」から「高」への rank order が考えられ、後の「相関マトリックス」や「主成分分析」においてテクニカルな問題が生じることはないということが確認されたのである。

(iv) 「死後の世界」「天国」「地獄」「奇跡」「輪廻転生 (生まれ変わり)」「涅槃 (悟りの境地)」「祖先の霊的な力」の存在を信じるか？

日本調査の質問文 (V35～V41: Q18A～G) は、まずこれらの 7 つの事柄をあげた上で、それぞれについてつぎの 4 つの選択肢で答えてもらうとい

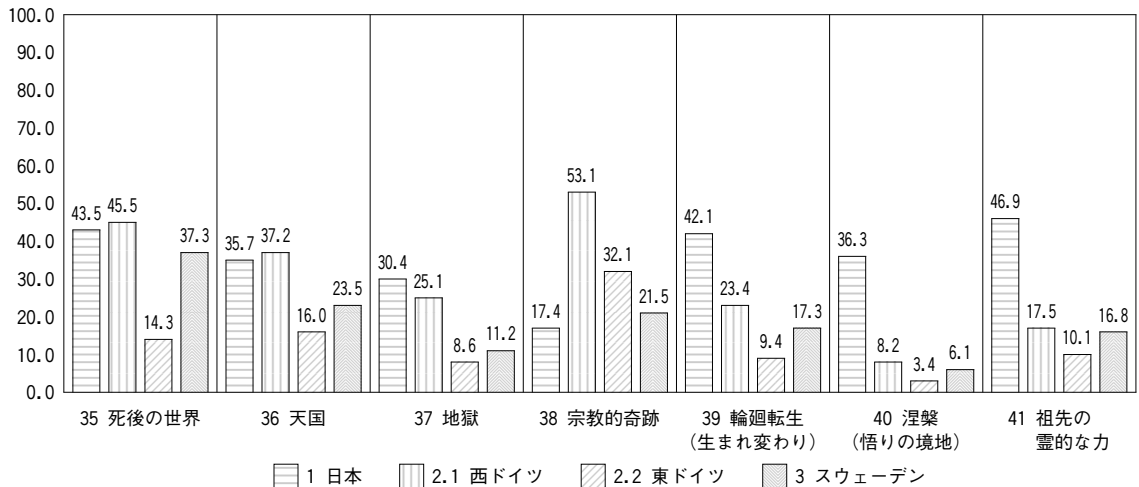


図8 「死後の世界」「天国」「地獄」「奇跡」「輪廻転生(生まれ変わり)」「涅槃」「祖先の霊的な力」の存在を信じるか？

う形式を採用している。

1. 絶対にある
2. たぶんある
3. たぶんないと思う
4. 決してない

回答の結果は図8のとおりである。選択肢の1と2を加算した肯定的回答(つまり、それぞれが「あると思う」とした回答)の%を示した図8から、回答の結果に3つのパターンが見られることがわかった。

①「死後の世界」「天国」「地獄」に見られるパターンであり、それは日本と西ドイツの%が高く、つぎがスウェーデン、最後に東ドイツという順位である。

②「宗教的な奇跡」に見られるパターンであり、それは、西ドイツの%が群を抜いて高く、つぎが東ドイツ、そしてスウェーデン、最後が日本という順位である。

③「輪廻転生(生まれ変わり)」「涅槃」「祖先の霊的な力」に見られるパターンであり、それは日本の%が群を抜いて高く、それにくらべて西ドイツ、スウェーデン、東ドイツの%はいずれも低いレベルにとどまるというものである

まず、①のパターンでは、地域ごとの違いも見られるが、それと同時に、項目ごとの順位も見られる。つまり、それぞれが「存在すると思う」という回答の%が、「死後の世界」で高く、つぎが「天国」、そして「地獄」という順位となっている

ということである。この順位は、現代における「宗教性」の1つの側面を端的に示したものといえるかもしれない。科学の時代といわれる現代においても、かなりの数の人びと(日本と西ドイツではほぼ半数に迫る人びと)が何らかの形での「死後の世界」というものを考えるが、それを伝統的な宗教が示してきたような「天国と地獄」という形で思い描くかということ、そのような人びとの数は少なくなる。そして、その数は「天国」よりも「地獄」でさらに少なくなる。

前者の側面については、それは言葉の広い意味における啓蒙主義的な考え方の浸透と、しかしそれにもかかわらず、なお何らかの形での「自己の存在の持続」を希求する現代人の心の世界の実相を示唆したものといえないであろうか。

後者の側面については、そこには「punishment(地獄)よりもreward(天国)を」という、現代人の意識傾向——“rosy view(バラ色の見方)”あるいは“happy ending view(幸せな結末の見方)”——が端的に示されているといえるかもしれない。しかし、この点については、再び地域差ともいべきものが見られる。「天国があると思う回答者の%」-「地獄があると思う回答者の%」の値は、西ドイツとスウェーデンで高く(12%程度)、日本と東ドイツで低い(5~7%程度)のである。このような差異については、それぞれの地域の社会・歴史的要因を取り入れた分析が必要となる。

つぎに、②のパターンでは、「宗教的奇跡」についての考え方が、日本とキリスト教の国とでどのように異なっているかという視点を分析に取り入れる必要がある。聖書に描かれた「宗教的奇跡」と神話・仏教説話に登場する「宗教的奇跡」には、さまざまな点で「違い」が見られる。このような点が、ここでの結果——この項目でのみ、日本の回答者の%が最も低いレベルにとどまっている——に反映されている可能性は高いと考えられる。しかし、ここでは、このような問題の所在を指摘するにとどめる。

最後に、③のパターンは、②のパターンと対照的であるといえよう。つまり、②のパターンでは日本の%が例外的に低いのにに対して、③のパターンでは、日本の%が群を抜いて高い。それは、「輪廻転生（生まれ変わり）」「涅槃」「祖先の霊的な力」という質問項目が、いわば「特殊アジア的な内容」を含む項目であることによるものと考えられる。じつは、この点は調査票作成の段階から意図的な試みとしてなされたのである。その意図はというと、これまでの国際比較調査では、欧米のキリスト教的な考え方を前提とした質問項目が、多くの場合そのままの形でアジアの国々においても用いられてきた。そこで、今回はそれとは全く逆に、特殊アジア的な内容の質問項目をそのままの形で——たとえば「涅槃（Nirvana）」についてさえ、日本以外の国々には、何の説明も付さずに——欧米においても用いるという仕方をとってみるということである。そしてそのような意図的な試みの結果として、これらの項目が“Nation Specific Items”ともいべきものであることが、実証的に明らかとなったのである。

しかし、このような試みについては、さまざまな点について、議論が残されたままとなっている。その1つとして以下のような議論がなされるであろう。欧米のキリスト教的な考え方を前提とする質問文についていえば、すでに日本においてもそのような考え方が人びとのなかに広く浸透してきているという点を確認しておかなければならない。たとえば、「天国」という用語は、神道の国・仏教の国といわれる日本においても、すでに広く用いられる言葉となっている。むしろ「浄土」や「極楽」よりも、その使用頻度は高いので

はなかろうか。そのような事情とくらべて、「涅槃」といった用語は、欧米のキリスト教の国々には全く馴染みのない言葉であろう。そのような特殊アジア的な用語をいきなり質問文で用いても、回答者はただ戸惑うだけなのではないだろうか。いや、事情は日本においても同様で、「涅槃」についての正確な意味内容は、決して広く日本人に共有されたものとなっていないのではなかろうか。その証拠に、この質問項目について「その存在を肯定する回答者」の%は、「生まれ変わり」「祖先の力」とくらべて10%程度も少なくなっている。

また、ここでの質問文で取りあげた諸項目が、異なる地域・文化において、「等価性」のあるものといえるかどうかについては、さまざまな議論があるであろう。たとえば、“reincarnation”という用語を1つ取りあげても、日本調査では「輪廻転生（生まれ変わり）」という訳語が用いられており、それは日本人には馴染みのある用語となっている一方で、伝統的なキリスト教の考え方からするならば、この用語の意味は必ずしも明確ではないという問題がある。具体的にいえば、reincarnation（生まれ変わり）の意味内容は、resurrection（復活）のそれとはどのような点で重なり合い、どのような点で異なっているのだろうか。議論すべき事柄は少なくない。

こうして、調査結果からの「知見の読み取り」は、社会科学にとっては、決して「到達点」ではなく、どこまでも「出発点」にすぎないのである。調査の諸知見をめぐって、どれだけ豊かな仮説が構成されるかが重要である。

最後に、ここでの知見の読み取りのもう1つの結果についても記しておきたい。それは、ここでの諸項目についての回答の%と、Religious Denomination についての質問項目への回答の%を比較して見ることから見えてくる結果である。

日本においては、「信仰がある」と答えた人は38%であった。この%とくらべるならば、ここでの「死後の世界」「天国」「地獄」「奇跡」「輪廻転生（生まれ変わり）」「涅槃」「祖先の力」が存在するかどうかについての回答の%は、それを越えるか、ほぼそれに近いものがほとんど——「奇跡」の場合を除いて——である。つまり、日本人の場

合は Religious Denomination と Religious beliefs との間にほぼ「一致 (consistency)」が見られる。

ところが、西ドイツ、東ドイツ、スウェーデンについては、いずれの地域においても、Religious Denomination の%とくらべて、Religious Belief の%がはるかに低いという「不一致 (inconsistency)」が見られる。

以上の点は、日本と西ドイツ・東ドイツ・スウェーデンの「宗教性」についてのきわめて興味深い特徴の1つといわなければならない。この点については、つぎのような議論を展開することができるであろう。

まず、日本は、これまで「宗教のない国」(柳川 1989) という性格づけがなされてきたが、それは「信仰があるか、ないか」という点に、焦点を合わせてその性格づけがなされてきたからで、ここでの Religious Beliefs という点に焦点を合わせるならば、また別の特徴が見えてくる。ここから日本人の「宗教性」の測定をめぐる新しい提案の可能性が拓かれてくるといえないであろうか。

つぎに、西ドイツ、スウェーデン——東ドイツについてはしばらく置き——の「宗教性」の様相については、ここでの諸知見との関連で、Kisala の「ヨーロッパにおける『信仰の有無』は『宗教教団への帰属の有無』を意味しており、それは『個人の主体的な意思』というよりも、すでに『社会的な慣習』ともいうべきものとなっている」(キサラ、永井、山田 2007) という指摘が注目される。このような点に焦点を合わせて、ヨーロッパのキリスト教の国々における「宗教性」の特徴を、データ分析をとおして、さらに探っていくという試みは、きわめて興味深い課題といわなければならない。(以下、次号に続く)

参考文献

- Almond, Gabriel A. and Sidney Verba (1963). *The Civic Culture: Political Attitudes and Democracy in Five Nations*. Princeton: Princeton University Press. (= 1973, 石川一雄ほか訳『近代市民の政治文化』勁草書房.)
- 荒牧央、小野寺典子 (2004). 「ISSP 国際比較調査の概要とデータについて」『国際比較調査のフロンティア』(21世紀 COE プログラム研究報告書)、関西学院大学。
- Bäckström, Anders, Ninna E. Beckman and Per Pettersson (2004). *Religious Change in Northern Europe: The case of Sweden*, Stockholm: Verbum.
- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann (1966). *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. (=2003, 山口節郎訳『現実の社会構成——知識社会学論考——』新曜社.)
- Edgards, Ninna and Per Pettersson (2010). The Church of Sweden: A Church for All, Especially the Most Vulnerable, in Anders Bäckström et al. eds., *Welfare and Religion in 21st Century Europe*, England and USA: Ashgate Publishing Limited.
- Halman, Loek, et al. (2008). *Changing Values and Beliefs in 85 Countries: Trends from the Values Surveys from 1981 to 2004*, Leiden and Boston: Brill.
- Jagodzinski, Wolfgang (2006). Comparative Survey Research and its Infrastructure in Europe, 『関西学院大学社会学部紀要』第101号。
- Jagodzinski, Wolfgang and Kazufumi Manabe (2009). On the Similarity of Religiosity in Different Cultures, in Max Haller, et al. eds., *The International Social Survey Programme 1984–2009*, London and New York: Routledge.
- キサラ、ロバート、永井美紀子、山田真茂留 (2007). 『信頼社会のゆくえ——価値観調査に見る日本人の自画像——』ハーベスト社。
- 小堀真 (2008). 「宗教性の諸相とその規定要因——近年の宗教性・スピリチュアリティ研究の比較・検討——」『現代人の価値意識と宗教意識の国際比較研究』(科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書)、関西学院大学。
- Lewis-Beck, Michael S. (1994). Basic Measurement, in *International Handbooks of Quantitative Applications in the Social Sciences*. Vol. 4. London: Sage.
- Lykken, D. (1968). Statistical Significance in Psychological Research. *Psychological Bulletin* 70.
- 松谷満 (2008). 「アメリカを中心とした宗教の社会心理学的研究」『現代人の価値意識と宗教意識の国際比較研究』(科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書)、関西学院大学。
- 真鍋一史、Wolfgang Jagodzinski (2000a). 「家族と宗教——価値志向の視座から——」『関西学院大学社会学部紀要』第88号。
- 真鍋一史、Wolfgang Jagodzinski、小野寺典子 (2000b). 「ドイツと日本における家族志向と宗教——ISSP 宗教調査データの分析——」『NHK 放送文化調査研究年報』第45集。
- 真鍋一史、Wolfgang Jagodzinski (2002). 「家族と宗教

- 『世界価値観調査 (World Values Survey)』データの分析——』『関西学院大学社会学部紀要』第91号.
- 真鍋一史 (2005). 「社会調査と社会学理論——質問紙法による社会分析の革新をめざして——」『先端社会研究』第3号、関西学院大学出版会.
- 真鍋一史 (2008). 「日本的な『宗教意識』の構造——『価値観と宗教意識』に関する全国調査の結果の分析——」『関西学院大学社会学部紀要』第104号.
- 真鍋一史 (2009). 「『宗教意識』の構造——日本とドイツにおける国際比較——」『関西学院大学社会学部紀要』第107号.
- 真鍋一史 (2010a). 「スウェーデン」『平成21年度海外の宗教事情に関する調査報告書』(文化庁文化庁宗教課).
- 真鍋一史 (2010b). 「欧米社会学における宗教理論と宗教調査——宗教研究における『他者性』の問題——」『関西学院大学 先端社会研究所紀要』第4号.
- 丸山真男 (1956). 「政治学」『社会科学入門』みすず書房.
- 直井優 (1993). 「測定モデル」、森岡清美、塩原勉、本間康平編『新社会学事典』有斐閣.
- 西久美子 (2009). 「“宗教的なもの”にひかれる日本人～ISSP 国際比較調査 (宗教) から～」『放送研究と調査』2009.5 (NHK 放送文化研究所).
- 尾嶋史章 (1993). 「単純集計」、森岡清美、塩原勉、本間康平編『新社会学事典』有斐閣.
- 滝浦静雄 (1989). 「生の哲学」「創造的進化」「エラン・ヴィタル」木田元ほか編『コンサイス 20世紀思想事典』三省堂.
- 高根正昭 (1979). 『創造の方法学』講談社.
- 和辻哲郎 (1947). 『古寺巡礼』岩波書店.
- Weber, Max (1921). *Soziologische Grundbegriffe* (=1953, 阿閉吉男、内藤莞爾訳『社会学の基礎概念』角川書店. =1993, Translated and with an Introduction by H. P. Secher, *Basic Concepts in Sociology*, New York: Carol Publishing Group.)
- 柳川啓一 (1989). 『宗教学とは何か』宝蔵館.

Cross-national comparison of the dimensions and structure of religiosity: ISSP 2008 Data Analysis

ABSTRACT

A variety of studies have been conducted on the structure of religiosity. The term “religious consciousness” is more often used in Japan than “religiosity,” but here we use the term “religiosity” for the convenience of cross-national comparison. These studies suggest that religiosity has a multidimensional structure, and they primarily aim to extract and measure those multiple dimensions through data analysis of questionnaire surveys. Based on previous studies, this paper divides religiosity into three dimensions: (1) religious denomination, (2) religious practice, participation, and behavior, and (3) religious belief. By conducting a secondary analysis of the data from the Religion Module Survey (2008) of the International Social Survey Programme, we focus on these three dimensions, and try to clearly identify the characteristics of religiosity in three countries: Japan, Germany, and Sweden. Almond and Verba argued that one of the methodological advantages of cross-national comparative surveys is that “cross-national research encourages the reinvestigation and clarification of concepts (variables) and ensures that equivalence problems are carefully examined.” Based on this methodological perspective, we select three countries with different religious backgrounds for data analysis in this study. For the same reason, data analysis is conducted by dividing Germany further into West Germany and East Germany.

Key Words: religiosity, ISSP, data analysis, measurement model, causal model, denomination, religious belief, religious behavior